

前期 A

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私見によれば、ポピュリズムとは「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」という考え方をする人たちが主人公になった歴史的過程のことである。

個人的な定義だから「それは違う」と口を尖らす人がいるかも知れないけれど、別にみなさんにこの意味で使ってくれと言っているわけではない。

「今さえよければいい」というのは時間意識の縮減^Aのことである。平たく言えば「サル化¹」のことである。「朝三暮四」のあのサルである。

中国、春秋時代の宋にサルを飼う人がいた。朝夕四粒ずつのトチの実をサルたちに給餌していたが、手元不如意になって、コストカットを迫られた。そこでサルたちに「朝は三粒、夕に四粒ではどうか」と提案した。するとサルたちは激怒した。「では、朝は四粒、夕に三粒ではどうか」と提案するとサルたちは大喜びした。

このサルたちは、未来の自分が抱え込むことになるゾンシツやリスクは「他人ごと」だと思っている。その点ではわが「当期利益至上主義」者にコクジ^Bしている。「こんなことを続けていると、いつか大変なことになる」とわかっているながら、「大変なこと」が起きた後の未来の自分に自己同一性を感じることができない人間だけが「こんなこと」をだらだら続けることができる。その意味では、データをごまかしたり、仕様を変えたり、決算をフンシヨク^Cしたり、統計をごまかしたり、年金を溶かしたりしている人たちは「朝三暮四」のサルとよく似ている。

「朝三暮四」は自己同一性を未来に延長することに困難を感じる時間意識の未成熟（「今さえよければ、それでいい」）のことであるが、「自分さえよければ、他人のことはどうでもいい」というのは自己同一性の空間的な縮減のことである。

集団の成員のうちで、自分と宗教が違う、生活習慣が違う、政治的意見が違う人々を「外国人」と称してハイジヨ^Dすることに特段の心理的抵抗を感じない人がいる。「同国人」であっても、幼児や老人や病人や障害者を「生産性がない連中³」と言って切り捨てることができる人がいる。彼らは、自分がかつて幼児であったことを忘れ、いずれ老人になることに気づかず、高い確率で病を得、障害を負う可能性を想定していないし、自分が何かのはずみで故郷を喪い、異邦をさすらう身になることなど想像したこともない。見知らぬ土地を、飢え、渴いて、さすらい、やむにやまれず人の家の扉を叩いたときに、顔をしかめて「外国人にやる飯はないよ」と言われたときにどんな気分になるものかを想像したことがない。

自分と立場や生活のしかたやシンキョウ^Eが違っていても、同じ集団を形成している以上、「なかま」として遇してくれて、飢えていればご飯を与えてくれ、渴いていれば水を飲ませてくれ、寝るところがなければ宿を提供することを「当然^B」だと思っている人たち「ばかり」で形成されている社会で暮らしている方が、そうでない社会に暮らすよりも、「私」が生き延びられる確率は高い。噛み砕いて言えば、それだけの話である。

「倫理」というのは別段それほどややこしいものではない。「倫」のゲンギ^Fは「なかま、ともがら」である。だから「倫理」とは「他者とともに生きるための理法」のことである。他者とともにあるときに、どういうルールに従えばいいのか。別に難しい話ではない。「この世の人間たちがみんな自分のような人間であると自己利益が増大するかどうか」を自らに問えばよいのである。

（中略）

もう一度言うが、倫理というのとは別に難しいことではない。今ここにはいない未来の自分を、あるいは過去の自分を、あるいは「そうであったかもしれない自分」を、「そうなるかもしれない自分」を、「自分の変容態」として、受け容れることである。そのようなすべての「自分たち」に向かって、「あなたがたは存在する。存在する権利がある。存在し続けることを私は願う」という祝福を贈ることである。

（内田樹『サル化する世界』による）

問一、波線部 a～f のカタカナを、漢字に改めよ。

問二、傍線部 1 「平たく言えば」と違う使い方をしている言葉を次の中から選び、記号で記せ。

ア 分かりやすく言えば イ たとえて言えば ウ 率直に言えば エ 本音で言えば

問三、傍線部 3 「生産性がない連中」について、傍線部 2 「当期利益至上主義」という言葉を使って五十字程度で説明せよ。

問四、傍線部 A 「縮減」という言葉の反意語を本文中から選び、記せ。

問五、傍線部 B 「当然」という言葉と違う意味の言葉を次の中から選び、記号で記せ。

ア 勿論 イ 無論 ウ 自然 エ 元より

問六、筆者が考える「ポピュリズム」という言葉の反意語を本文中から選び、記せ。

二、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私たち研究者も、ときにプレスリリースというものをするところがある。新しい成果が出て、一般の人々にも知ってもらいたいと思われるような、社会的インパクトの強い発見などがあつた場合である。

私たちの研究は、多かれ少なかれ国民の税金によって担われている、もう少し正確に言うと、科学研究費補助金と言われる競争的資金がその大きな部分を占めている。この補助金そのものはもちろん税金による国家予算の一部であり、大学における研究の大部分が、このような税金のおかげをこうむっていることは確かである。

従つて、何か公の利益になるような発見があつた場合、あるいは直接の利益ではなくとも、一般のキョウミをひくような大きな発見があつた場合は、積極的にそれを公表し、科学者集団以外の人々にも、その成果の共有化をはかることが大切なことであるのは間違いない。

いっぽうで私は、このいわゆるプレスリリースに関して、二つの点でじゃっかん苦々しく思っている点がある。

一つは、研究者が過剰にプレスリリースをしたがること。わが身を反省しつつ言うのだが、どうもなんでもかんでもプレスリリースにかけたがる傾向がちよつと過剰だと感じる人が多い。おまけに最近では、科学研究費の申請書や、研究報告書に、プレスリリースなどをレッキョウする項目まであつて、それ自体が業績のひとつと見做される傾向をなしとしない。また、プレスリリースによって大学の研究力のアピールという側面が強調され、できるだけ積極的に行うように要請されているようでもある。正直言つて、こんなことまで新聞に載せるか？ と疑問に思うようなことまでリリースされているというのが現状である。

できるものをして何が悪いと言われれば返す言葉がないが、そしてそれが研究費獲得や大学の宣伝にプラスになるのであれば、なおさら駄目とは言いにくいだが、研究者の志向がみなその方向に向かうのを、どこかさもしいという思いを持って見ってしまう自分がいる。

積極的に自分の発見や成果をみんなにカイジして見てもらい、そこから多くのシヤや批判を得ることが大切であることは間違いないが、どこかで研究者にはある種の慎ましき、寡黙さも必要とされているのではないかと思うのは、私の美意識なのであろうか。

いま一つの違和感は、研究費を出す側が、税金から成っている研究費だから、それを受給して研究を行っている研究者は、それに見合つた社会的貢献をしなければならぬという無言の圧力である。

申請書や報告書に、プレスリリースの実績を書き込む欄があることはすでに述べたが、同じように、自身のやっている研究の「社会へのハキユウ効果」を述べる欄もある。自らの研究が、どのように社会の役に立つかを記述するのである。私などは、研究費の審査をするとき、そんな欄をほとんど見ないで審査しているが、そのような欄が設けられていること自体、研究費の受給の要件として、社会の役に立つか、立たないかが重視されている、あるいはされるべきだという姿勢の顕われなのであろう。

さて、プレスリリースである。その場で必ず質問されるのは、その研究がどんな役に立つのかという点である。公の研究費を使つてなされる研究であれば、それがどのような役に立つかを尋ねられるのは、当然のことではある。

しかし、何かをやるとき、あるいはやつたとき、すぐにそれが何の役に立つかを考えるという思考パターンについては、それでいいのかという反芻をしてみる必要があるだろう。それは、何かをやるときはその効果、効用、あるいは見返りがあるはずだという考え方そのものへの疑問であると言つてもいいかもしれない。

勉強について考えようとするとき、それはよりケンチョであろう。勉強しなさいと言われる。なぜ勉強しなければならぬのか。それは、いい成績をとるため、というのがもつとも端的な答えであろう。期末試験や模擬試験でいい点数をとるため、偏差値の高い大学をめざすため、入試に合格するため。ため、ため、目的の目白押しである。そういえば、「しっかりと目標を立てて勉強をしなければ」という言葉も、耳にタコができるくらい聞いた覚えがあるだろう。

勉強をするための動機づけとして、いつもこの「ゝのために」というフレーズがつかいてくる。あるいは逆に、勉強をしなければ、「ゝのために」の部分が発現できませんよという脅しとしても使われるだろうか。「勉強しないといひ大学に入れませんよ」。

高校生までの生徒への動機づけとしては、それはわかりやすくいいかもしれない。しかし勉強というものは、大学に入つてしまえば終わりというものでは、もちろんない。むしろ、高校を卒業してからの、本当の勉強であるとも言えるのである。

ところが、勉強があまりにも目的と対となつて身につけてしまつてきたために、大学に入ったとたん、学ぶということの意味と意義を失つてしまふ学生が多すぎるように思うのである。なにしろ、大学に入るためという目的は、大学に入つてしまえば、すでに達成してしまつたのである。その目的そのものが、その時点でなくなつてしまつた。さあ、どうしようというわけである。

かつて大学では、五月病といわれる病気があつた。希望に燃えて大学に入ったのはいいが、1か月も経つと、その興奮もいったん冷め、さてこれからどうしたらいいのか、どうにも目標がつかめなくなつて、途方に暮れてしまうのである。鬱状態になつて、保健相談室などが繁昌することになった。

これも、大学に入るといふ目的、目標が達成されてしまつたがために起こる病気だったのであろう。当面の目的が、「学ぶ」ということの究極の目的として組み込まれてしまつたために起こつた現象であらうと思う。

(永田和宏『知の体力』による)

問一、波線部 a～f のカタカナを、漢字に改めよ。

問二、傍線部 1 「プレスリリース」とは何か、本文中の別の言葉を用いて十字以内で記せ。

問三、傍線部 1 「プレスリリース」について、筆者が苦々しく思っている理由は何か、簡潔に記せ。

問四、傍線部 2 「さもしいという思い」とは、どのような思いか、記せ。

問五、傍線部 3 「高校を卒業してからが・・・」と言える理由は何か、記せ。

二〇二四年度 倉敷芸術科学大学 一般選抜

前期 A
〔国語〕

一、

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a					
b					
c					
d					
e					
f					
f					

二、

問一	問二	問三	問四	問五
a				
b				
c				
d				
e				
f				
f				

受験地	受験番号	得点欄
		※

※は記入しないこと